

# 塊状の形から粘土を掻き出して！

—— 色化粧土で彩色した「カラフルキャンディーポット」 ——



## 表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：楽焼用粘土、色化粧土
- ・造形要素（色／形／材質）：塊状形から、形のデフォルメ／単純化、キャンディーポットの色と形
- ・表現技法：手びねり、粘土の糸切り、掻き出し、貼り付け、線彫り、化粧土による彩色、ほか
- ・表現様式：具象形、抽象形
- ・表現対象／主題：キャンディーポット／入れ物の要件と形の面白さを表現者が思考、追究、決定する

写真1 「象のキャンディーポット」  
〔約1180℃焼成／無釉〕（高さ約13cm）

## 造形発想と表現について

イメージした形をそのまま袋状の入れ物につくる最も単純で、作りやすい技法に「掻き出し」がある。

表現技法にはそれぞれの特徴がある。

「ひもづくり」や「板づくり」の技法でも、袋状の入れ物をつくることができる。しかし、技術的な条件が優先されるため、形の柔軟さや自由さは「掻き出し」の技法に比べると制限される。

「掻き出し」の技法は、任意の塊状の形をつかって中の粘土を掻き出すため、大物づくりには向いていないが、自由に意図する形の入れ物をつくることができる。

その際、入れ物としての要件を満たす形をデフォルメし、デザインすることが必要であり、

発想としてのひとつの要素でもある。その意味でも、塊状の形から発想することは、入れ物の要件を満たしやすい技法でもある。

表現対象としての小物入れである「ポット」は、具象、抽象のどちらの可能性も考えられる。中に入れたいもののイメージからポットの形を考えるのもひとつの発想である。

色化粧土で彩色し、無釉で焼成した。

## 用具／材料

楽焼用粘土（約1.5kg）、どべ、色化粧土（各色）、粘土板、粘土べら、粘土掻き出しべら、粘土切り針、切り糸、筆、パレット、カップ（どべ／化粧土入れ）、雑巾、新聞紙、（ビー玉などのガラス）、ほか

## 表現のプロセスと内容

### ●キャンディーポットの形を大まかな粘土の塊としてつくる

- ・ポットの細部は考えず、大きな粘土を塊としてつくる。(写真2)  
《対象(モチーフ)としてポットの形を発想するときは、入れ物としての要件を満たすように形を膨らませるなどデフォルメ／単純化してデザインする。》

### ●キャンディーポットの形や蓋のつまみ、細部や模様などをつくる

- ・粘土をつけ加えたり、貼りつけたり、削り取ったりしながら形をつくり上げる。(写真3)
- ・ポット全体の形と蓋のつまみの関係を考えてデザインすると楽しい。(各写真作品参照)
- ・粘土べらで線描きしたり、型押ししたりして模様をつけることなどもできる。

### ●作品を生乾きにし、切り糸で蓋を切り取る

※生乾き：創作陶芸講座4／「板状粘土をレリーフに構成して！」参照

《粘土が柔らかいと、蓋を切るときに形や切り口が歪んでしまうことがある。》

- ・蓋と本体のバランスを考え、切り取る部分におおよその線を描いておく。

《蓋あるいは本体の入れ口が小さくならないように気をつける。》

- ・作品をしっかりとおさえ、切り糸を強く張って蓋を切り取る。(写真4・5)

《本体や蓋の切り口が歪まないように扱う。》

### ●キャンディーポットの中の粘土を掻き出す

- ・粘土を掻き出す目安として、本体の切り口に約1cm程度の厚さを想定し、粘土べらで線を描いておく。(写真6)



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7

- ・線の内側に沿って、粘土掻き出しべらで粘土を掻き出す。(写真7・9)(図1)  
《ポットの形に合わせ、できるだけ厚みが均等になるように中の粘土を掻き出す。》
- ・必要に応じて、蓋からも粘土を掻き出しておく。(写真8)

### ●蓋に「ずれ止め」をつける

- ・蓋の内側、2か所に爪状の「ずれ止め」を内向きにつける。(図1)(写真13)  
《縁の全体に沿ってつける方法もある。》  
《蓋に限らず、掻き出した粘土をさまざまな部分に再利用する。》

### ●キャンディーポットを化粧土で彩色する

※化粧土：創作陶芸講座4 / 「板状粘土をレ

リーフに構成して！」参照

- ・化粧土を筆につけ、粘土の表面に置くように塗っていく。(写真10・11・12・13)  
《混色や重ね塗りもできるが、厚く塗りすぎると化粧土が剥落するので注意。》

### ●乾燥させて無釉薬で焼成する

- ・完成した作品を日陰で十分に乾燥させる。(写真14)  
《夏で10日、冬で20日程が目安である。》
- ・素焼き程度の低火度でもよいが、ここでは1180℃で焼成した。
- ・蓋と本体は重ねた状態で焼成するが、間にアルミナを塗ったり、紙をはさんだりしておく、相互の接着を防げる。

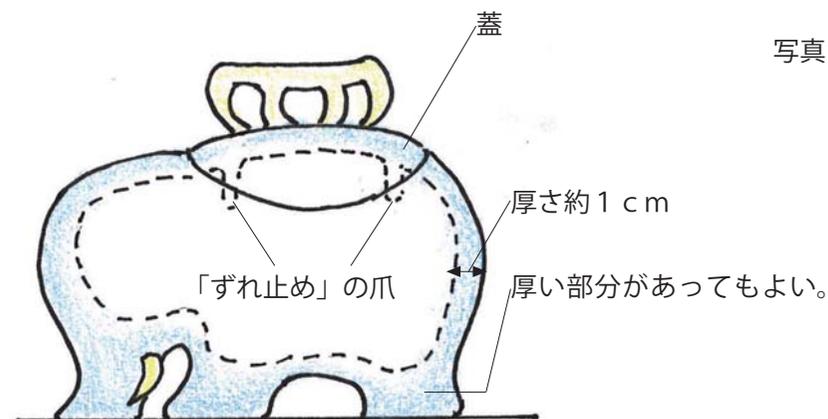


図1 キャンディーポットの断面図

写真8



写真9



写真10



写真11



写真 12



写真 13



写真 14

## 表現のバラエティ



写真 15 完成作品 「象／蓋を外した状態」〔約 1180℃焼成／無釉〕（高さ約 13 cm）



写真 17 完成作品 「鶏」〔約 1180℃焼成／無釉〕（高さ約 13 cm）



写真 18 完成作品 「カボチャ」〔約 1180℃焼成／無釉〕（高さ約 10 cm）



写真 16 完成作品 ポットの  
中にガラスを入れて焼成 「メ  
リーゴーランド／蓋を外した状  
態」〔約 1180℃焼成／無釉〕（高  
さ約 10 cm）

※ビー玉などのガラスを入れて  
焼成するときには約 1100℃以  
上の温度が必要。



写真 19 完成作品 「たつ魚の  
キャンディポット」〔約 1180℃  
焼成／無釉〕（高さ約 10 cm）



写真 20 完成作品 「たつ魚の  
キャンディポット／蓋を外した  
状態」